

My " revenge play" ～僕の『復讐劇』～

血糊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大きな勘違いをしてしまったヒーロー達に全てを奪われた少女のお話。

平和な日常をぶち壊したヒーロー達をヴィランとなった彼女は殺していく。

殺して、殺して、果ては母を殺したヒーローの皮を被った化け物の心臓を貫く時まで……

うん？復讐なんて物騒な名前だな、だって？

まさかこれがどシリアス物語とでも思ったか？どこぞの青いツナギの男すら出てくるようなおふぎけ満載の物語さ。たまにシリアス混じるけど。

アンテ×カービィ×バイオのヒロアカ物語が行き詰ったために書き始めた話です。

目次

| | | |
|-----|----------------------|----|
| # 4 | 逃走 (Getaway) | 20 |
| # 3 | 遭遇 (Encounter) | 13 |
| # 2 | 脱出 (Escape) | 8 |
| # 1 | 復讐鬼 (Revenant demon) | 1 |

#1 復讐鬼 (Revenant demon)

a. m. 4 : 44

熱い。

体中傷だらけで痛い、というよりなぜか熱い。

でも、体の芯はとても寒い。

這いつくばっている体を起き上がらせようとすると、腹に激痛が走って血がごぼつと溢れてくる。

突然片足の感覚が消えた。その直後、腹の痛みよりもっと強い激痛と熱さが僕を襲う。

やめてくれ、死にたくないと言っても僕より小さなそいつはやめない。

ああ、両腕と両足の感覚が、四肢が無くなった。僕の血に塗れたあの銀色の剣に切り落とされてしまった。

そのうち体中の熱がどんどん冷めていった。まるで全裸で大雪の中に放り出されたような凍える寒さだ。

なんで、なんでこんなことをするんだ!? 僕が君に何をしたって言うんだ!

そう言ったら、そいつは**髑髏**を継ぎ接ぎして色々な器具を取り付けたようなとても不気味な仮面のせいでくぐもった声で言った。

「何惚けたこと言ってるんだ? お前が何の罪も無い人々を快樂目的で惨殺してたんだろうが」

復讐と言いたいのか!? だからって何でお前が……

「ボク……じゃなくて俺は『復讐鬼』さ。五年の月日が経っても昔の恨みを忘れられず、むしろどんどん酷くなっていく位執念深くとてもしつこい。そんな復讐鬼。だから」

そいつがさつきまで僕の持っていた鉞を振り上げる。月の光を反射してきらりと眩しく光った。

「君を犠牲者達よりももっと苦しめて、君の犠牲者達にやっていた殺し方で、君を殺すんだ」

僕の頭めがけて、鉞が振り下ろされた。

「……まあ、犠牲者云々よりも、ご近所の光浦さんを殺した復讐だけだね」
もしも彼が生きていたと言うのなら、きっと見てしまっただろう。
月の光の逆光を受けている彼女が仮面を外し、その顔にあまりにもそぐわない様な冷酷な表情を浮かべていたことを……

p. m. 3:24

私服の黒いパーカーを着てしつかりとフードを被りながら彼女は街中を歩く。

沢山の人々が通る街道のなかにその姿は溶け込んでいた。
そんな彼女の正体……まあさっきの話を目に通してる読者方なら大体察しているだろう。

その通り。彼女は『復讐鬼』。早い話がヴィランということだ。
彼女の『ヴィラン名』は赤谷海雲。

ヒーローへの復讐に狂った、冷酷で無慈悲な殺人鬼、とプロヒーローの中で言われている存在だ。

……自業自得なところに目を瞑りながら言ってるわけだが。
「えーと、まずは八百屋で白菜と葱を、魚屋で海老と貝と魚を、スーパーで肉と干し椎茸を買って、あと確か白味噌が切れてたって黒霧さん言ってたから……一時間は掛かりそうだな」

記憶の買い物メモの内容を呟きながらお店へ向かう姿は、まるでお

「まさに因果応報、ってやつかな。どんまい♪」

表情が台詞を裏切っている。いや、口元は笑っているのだが、目が全く笑っていないのだ。

ヘドロヴィランを見る目が、まるでゴミを見るような目で見ているのだ。まあ確かにゴミだといふのは否定できないのだが。

気絶したヴィランの横を通り抜けて目的地へと向かおうとする彼女をある者が呼び止めた。

「おい、さつきはアンタが助けてくれたのか？」

「え、違うけど。ボクはあのヴィランが道を塞いでたから眠らせようとしただけ」

「眠らせる……？」

「さつき撃つたのは麻酔ボルト。即効性のね」

「ふーん……なんでそんなのを持ってるんだよ」

「君が知ったって全然意味無い？それじゃ、バイバイ」

「え——ツ!?待て、お前は……!」

彼の言葉を待たずに彼女はそこから走り去っていった……

「おい、怪我は無いか!？」

「……ああ。大丈夫」

「ほっ……さつき。は助けられなくて本当にすまなかった……それにしても今回は助かっちゃったな、あいつに」

「?知ってるのか」

「ああ、奴は赤谷海雲。かなり危険なヴィランだ」

「……は?ヴィラン、だと?」

「信じられないだろうけど、マジだからな。奴がクロスボウ持ってた

のは相手を殺さないように無力化させるためさ」

「なんで無力化させるんだよ」

「自分が絶対に殺さないといけない対象以外は絶対に殺さないっていうような変わった美学があるみたいなんだよな……なんか変わった奴なんだよ。でも殺す対象が上位のプロヒーローばかりでな、かなりの実力者をいとも容易く仕留めてる辺り、かなりやばい奴だよ。だから、助けてくれた恩人だとしても奴には絶対関わるんじゃないやねぞ……いいな？」

俺に駆け寄って安否を確かめに来たそのプロヒーローが念のためとしての忠告をしてきた。

その真剣な顔は本当に心配してくれてるんだろうと分かる。

でも、その忠告に意味は無い。

「いや、どっちにしろ関わらなきゃいけないっつーことは変わらねえよ」

「おい今の話聞いておきながら何言ってるんだ」

「……だって、あいつは——」

昔死んだはずの幼馴染とあまりにも酷似しているからだ——

p. m. 6:25

「畜生……セール間に合わなかったあ……」

とぼとぼ帰る、帰り道。

彼の幼馴染は両手に沢山の買った商品を詰め込んだポリ袋を持って、人生のどん底に叩きつけられた人のような顔をしながら——実際本当に叩き落されたことはあるが——今の我が家へと向かっていた。

今彼女が通っている街道は、夕暮れ時だからか沢山の人々が通っていた。

そんな中に人生に絶望した顔で歩いている少女を見かけたら、大体の人の反応は……まあ大体分かるよね。

「(なんだろう……沢山の人たちに注目されてる……)」

そのうち何人かが話しかけてきたりした。彼女にとっては困惑しかなかったが。

「(あ、そろそろ急がないと、黒霧さんたちを心配させちゃう。急がないと——あれ?)」

走ろうとした矢先、突然視界がぼやけた。

体が一気に重くなる。意識が朦朧として、思わず荷物を落としてしまった。

「(いけない、落としちゃ——)」

そして、感覚の全てが黒へ染まった。

p. m. 8:16

ヴィラン連合アジトにて。

「妙に遅いな、海雲の奴」

「そうですね……何かあったんでしようか。もう8時を過ぎてしまいましたし、残り物で何かを作りますようか。鍋は明日にでも」

「分かった。じゃあ、ちよつとあいつ探してくる」

「もしものことがあったとき、一人ではどうしようもありませんよ？探すなら夕食を食べてからでお願いします。何、あの子のことですから大体のことが起こっても何とかできるでしょうよ」

「……確かにあいつのことだから存外、ケロツと帰ってくるかもしれないな。ところで、黒霧。何作るんだよ」

「野菜炒めです。残り物であるのは貴方が大っ嫌いな野菜ばかりですから」

「えっ」

「残さず食べてくださいいなね？」

「……………はい」

束の間の平和。

畳のにおいがする。

起き上がってみれば、酷く頭痛がする。

周りを見渡せば、襖に障子、掛け軸などがある。

おそらくここは和室という部屋なのだろうが、見たことが無い。

「……………どこ？」

赤谷海雲——またの名を緑谷出久——は全く知らない所で目覚めた。

#2 脱出 (e s c a p e)

a. m. 9 : 17

偶然だった。

ふらりと、気紛れに母の部屋へと入った。

誰も居るはずのない部屋に、一つ布団が敷かれていた。

そこで眠っていた彼女の顔に俺は酷く懐かしさを感じた。

五年前に失踪して、生存は絶望的だろうと言われていた、俺の小さい頃の親友。

未だに記憶の隅にしっかりと焼きついたその顔が、目の前の彼女に重なった。

その瞬間に俺は確信した。

間違はなく、目の前に居るのはあいつなんだと。

ある日、忽然と姿を眩ました『緑谷出久』なんだと。

でも、確信と同時に違和感を覚えた。

何かが違う。

目の前に居るのは確かに出久だ。

……出久の筈、なんだ。

a. m. 11 : 48

まずは状況を整理しよう。

確か僕は殺害対象のヒーローを探して一徹したせいでアジトに帰る途中で倒れた。そして今に至っている。

おそらく意識の無い間にどこかに運び込まれたのだろう。

見たところ刑務所の牢獄ではなさそうだが……

「待ってバッグは!？」

ぱっと周りを見回す。だが、何も見当たらない。

「そんな……!!」

安全がまだ確保されていない状況で手ぶらというのはかなり不味い。不測の事態が起こった時自己防衛が十分に出来ないからだ。

「いけない、まずは脱出経路の確認を！」

彼女は個性を使用する。

「《ダークビジョン》《プレモニション》」

壁越しでの生き物の動きを把握できる能力を使う。

「(——こつちに来てる!)」

プレモニションの効果でどこに向かっているのかが分かるため、近くに一人、彼女が居る部屋へと向かってきていることが分かった。

「(アレの応用なら出来るか?)」

使用している能力を解除して、相手が向かってきている速度でタイミングを計る。

一発勝負。ミスは許されない。

障子の窓から相手の姿が見え、動く。

「来た! 《ブリックツ!》」

相手の横をすれ違って、背後へとテレポートした。

「《バンドタイム》走れッ!!」

八秒間時を止める能力を使い、とにかく遠くへ走る。

途中、階段を見つけたのでさっさと飛び降りて、一階の廊下を全力で走る。

常に発動している能力である《アジリティ／ラピッドダッシュ》によつてかなりの速度で走れる為、あつという間に玄関らしきところに着いた。と同時に《バンドタイム》の効果時間が丁度切れた。切れてしまった。

「あ」

なんと同時に玄関のスライドドアが横へとスライドして、幾度か見かけた男が現れたのだ。

「……」

彼女と男の間で流れる沈黙。そして。

「うわああああ《ウインドブラストオツ!!!》
「がはあっ!？」

反射的に相手を吹き飛ばす能力を使っ
てしまひ……男は外へと吹っ飛ばされる。

しかも当たり所が悪かったらしく、そこで気絶してしまつた。

「……《ファアリーチ》」

《虚無の手》を呼び出して物体を引き寄せる能力で気絶した男を回収する。

片手で持ち上げながら家の中へとまた戻る。

近くに部屋はないかと周りをちらりと見ると、近くにあつた障子に目を留めてそこを開ける。

「リビングつてどこか。ここまでザ・和風みたいな作りだったし、もしかしたらこの家は日本家屋なのか？」

一人、そう呟いて部屋に入り、端っこに男を寝かせる。

偶然だつたがこれで一人、無力化できた。

「あとは、バッグを探すだけ……後は誰が居るんだっけ?」

彼女は冷静に自らの記憶の中から目的の情報を探し出す。

男の容姿から、おそらく正体はN.O. 2ヒーロー【エンデヴァー】だろう。となると、今彼女がいるのはおそらく轟家。轟家は日本家屋だから、なぜこの家がこんな^に和風な造りなのかも説明できる。

今持っている轟家の情報としては、確か母は家庭内の事情で入院中だからここには居ない。だからここには父子二人しか今の所は住んでいなかったはずだ。

先程玄関を見たときには、成人よりも小さなサイズの一人分しか靴は無かつた。だからおそらく母や客人は居ないだろう。^{エンデヴァー}父は今の所は気絶している。

結論からしてあとは轟家の嫡男だけだ。確か名前は……

「轟……焦凍……」

個性は〈半冷半燃〉。エンデヴァアの炎に加えて氷も使える個性で、油断すれば彼女でもすぐに捕まってしまう強力な個性……だったはず。

情報がうる覚えというのはどれだけ危険なのか。この瞬間彼女は悟った。

「うわあ……これからはナギの話、しっかり聞かなきゃ。まあ、まずは持ち物の奪還が先だけど。《ダークビジョン》」

轟焦凍、という単語にどこか引っかけかりを覚えながらも、さつき閉めた障子を開く……前に《ダークビジョン》を使おうとしたときだった。

「ッ!？」

体が突然ズン、と重くなったのは。

意識を保ったまま、彼女は崩れ落ちた。

突然の出来事に、一瞬混乱したが、何があったのかということは、すぐ理解出来た。

「——個性の副作用ッ!!」

彼女の個性は、短時間で何度も使用すると身体に大きな負担が掛かるというデメリットがある。

いつもならもう少し力を調整しながら使うものの、いかんせん今回は異常事態だった為に調整なしのフルパワーで使っていた。

(やばいやばいやばい……この酷さだと多分クールダウンにはかなり時間が掛かっちゃう。幸い身体は這いずりながらの移動なら出来るから、まずはどこかに隠れて)

後ろから障子の開く音がした。

#13 遭遇 (Encounter)

「っ。」

彼女はぎゅっと目を閉じる。

しかし、何も聞こえない。

恐る恐る目を開いて、後ろを向いた。

開けっ放しの障子。誰もいない。

「あれ？」

ちらり、と上を見る。

緑色の光を放つ、機械を見た。

そう、コンビニなどで見かける自動ドアの上にある、アレだ。

理解した瞬間、彼女は思わず「はあ!？」と声を上げてしまい、ぼつ

と手で口を押さえた。

「(なにそれ驚かせないでよ!!)」

なんらかの影響によって開いたんだろう。つまりはそういうカラクリだったということだ。

それにしてもなぜこの日本家屋の雰囲気を使い切り無視したものが導入されているのだろうか。

もしもここにアレを付ける判断をした張本人がいたら、

『なんでこの和風をぶち壊すようなものを取り入れてんだよ取り入れた奴というセンスしてんだよ!？』

と吠えていたことだろう……

「はは……もうそういう時代へとなっていたのか……日本の伝統はもうここまで機械に侵食されていたんだね……」

今更な事に遠い目をしていた。でも彼女のおぼろげな記憶の中にある日本の伝統は、案外感慨深いものだったために、ちよつとだけ悲しかった。

「……これ位にしないと、ちよつと不味い。隠れないと」

彼女は思考を切り替える。

もうとつづくに、少しずつ足音が近づいて来ていることには気が付いていた。

彼女はこの部屋に入った時から目を付けていた押入れへの襖を開ける。

中はいろんなものが入っていて（押入れだから当たり前）とても窮屈そうだ。だが一応隙間はあるのでその中に身を潜める。

と言っても、身体を限界まで縮こまらせてギリギリ入るくらいしかないのだが。

重い身体を強引に動かして、なんとかその隙間へと身を取めることができた。

「（丁度来たか）」

足音が、部屋のなかまで入ってきた。

歩く音の軽さからして大人ではない……やはり嫡男か。

……怖い。

久しぶりに、彼女は途轍もない恐怖に襲われていた。

「ツ!?親父!!」

先程男を寝かせた所へと足音は走って、止まった。

「死んでは……ないか。誰がやったんだ？」

「（お願い、来ないで……!!）」

息が漏れないように手で口をしっかりと塞ぎながら、昔から信じていない、むしろ大っ嫌いな神様に初めて彼女は祈る。

果たして、その願いは聞き届けられることは――

「……誰か居るのか？」

無かった。

足音の主は、彼女の襖の方へと、声を掛ける。

「っー」

声が、漏れる。

それが聞こえたのだろうか。足音の主は彼女の方へと近づいてくる。

規則的な足音が間近まで迫った時、襖の取っ手に手をかける音がした。

「(やめてッ!)」

目を閉じて、必死に懇願する。

それを開けないで、僕を見つけないでと。

ほんの少し、部屋の光が差した。

それだけだった。

それ以上は開かない。

足音の主にとっては数十秒、彼女にとって数時間位の時間がたち

……

「……誰も居ないか」

足音の主がそこを離れる。

音でその部屋から出て行ったと知った途端に、彼女はとてつもなく安堵した。

「(助かった……!)」

そつと襖を開けて、押入れから這い出る。

「……うん。一応動けるようにはなったかな」

部屋の風景の変化は特に無い。弄られた痕跡はなさそうだ。

やっと落ち着きを取り戻せたからか、いつもの癖でパーカーのポケットに手を突っ込む。

「?何か入ってる」

中に入っていたものを取り出す。

「あ、スマホ」

ポケットに入っていたのは、携帯だった。電源を付けて電池残量を確認する。問題はなさそうだ。

「……ん?」

いや、問題はあった。日付が変わっている。

日付が最後に見たときの数字より、一つ多いのだ。

つまりそれが意味してるのは……!!

「やばい生存報告ッ！」

メールでナギに生存報告する。『ごめん、ちょっとアクシデントがあつて遅くなつた。もうちよつとしたらそつちに帰れる』という内容を送信する。

「よし。あとはバッグを探すだけ」

時間が無い。急いで見つけなければ、と彼女は部屋を飛び出す――音を立てない程度に。

一階、二階を走り抜ける。幸い嫡男は部屋にいたようで、遭遇することはなかった。

しかしリビング、風呂場、などにしつかりと目を通すものの、いつも異様に黒い光沢を放っている合皮製のバッグは見つからない。けつこう目立つから視界の端っこに写つたらすぐに気づくはずなのだが。

「はあ……はあ……だめだ、見つからない」

今更だがここ屋敷だったのかと彼女は気づく。めっちゃ広かつた。止まらないようにしていたのでなんとか十分くらいで回りきつた。

しかし見つからない。嫡男の居ない部屋にも入って探したもののいろいろ漁つたがダメだった。

漁つただなんてまさか何か盗んだりしてるんじゃない？とでも思つた方。安心してください、やってませんよ？

彼女はヴィランだけど礼儀は弁えてる。やってはいけないことの区別は出来る。

それをすることが必要かどうか。それで彼女の行動は決まるのだから。

今回はバッグの搜索。盗みをする必要は無い。

彼女は玄関へと戻ってきた。

その靴箱の上。

そこに探していたものがあつた。

「あー！ー！つ！！あつた！！！」

思わず叫ぶ。ぱつとそれを取ったとき、その横にあつた紙切れが空中に舞う。

「？」

それを器用に空中で取る。

その長方形の紙切れには綺麗な字で何かが書かれている。

「……………」

そこに書かれていた文章。

それを見た彼女は暫し呆然として、ふと——口元を緩める。

「あーあ。一本取られた……世話になっちゃったね、焦凍君」

『かくれんぼは俺の勝ちだ』

その紙切れは、嫡男——轟焦凍からのメッセージだった。

*思い出『轟焦凍』を取り戻した。

彼女は轟家を出る。

「お邪魔しましたっ」と

そのうち恩は返さなければならぬだろう。そんなことを思いながら帰路をゆつくりと辿る。

しかし、まだ先程の疲れは完全に抜けてはいない。

意味の無かった10分間持久走もしたために疲れもかなりピークだ。能力乱用のときよりはまだマシだが。

傍^{はた}から見ても危ない足取りで歩いていた為に。

「うわっ!？」

「うおっ!？」

人にぶつかってしまった。

「ああ、すまない。怪我は無いか？」

「大丈夫です、僕がが前を見ていなかったせいで……すみません」
ぶつかった拍子に尻餅を付いた彼女はその相手を見上げる。

その相手は、青い（というか水色？）ツナギを着た男。

その人は体格が良かったために、少しふらつく程度で済んだようだ。

「立てるか？」

ツナギを着た男は手を伸ばす。けっこう紳士的な人のようだ。

「いえ、自分で立て、うわっ」

自力で立とうとするが、疲れのせいで上手く立てない。

そんな様子を見た男は自ら彼女の手を掴んで引き上げてくれた。

「わっ、す、すみません……」

「困った時はお互い様、というだろう？一度俺の家で休んでいくか？」

「えっ？なにもそこまでしなくても」

「このまま歩いてたら事故に遭うかもしれないだろ。ほら、家はすぐ

近くだから」

男は彼女の手を引き、家へと連れて行く。

……生憎、このとき人が周りにいなかったために、彼女はすんなりと連れて行かれてしまった。

青いツナギを着た男……このフレーズで誰のことかピンと来た読者方なら、彼女の今の状況がどれほど不味いのか、理解できるはずだ。

#4 逃走（Getaway）

p. m. 0 : 19

あと少し。

あと少しで家に着く。

そうすれば、念願が叶うんだ。

彼女の始めてを手に入れられるんだ。

時々捕まえようとしても必ず邪魔が入ったものの、今回は彼女がなぜかかなり疲労している上に人目が全く無い。

かなり好都合だ。

彼女はふらふらとした危なっかしい足取りで素直に俺の手に引かれている。意識もおぼつかないようだ。

何が起こっているのかも分からずに、どんどん危険へと引き込まれている。

普通ならそんな状態でもどこか可笑しいと気づけるはずだ。だが彼女からはそんな様子は見受けられない。

未だ純粹で、純情な女。

だからこそ俺は彼女を気に入ったんだろう。自分の手に収めたいと願ったのだろう。

彼女の純潔を汚すということをやってみたかったのだろう。

……こんな勝手な俺を、彼女は許してくれるだろうか？

もう家は目と鼻の先。ああ、うずうずしてきた。

笑みを浮かべて歩く速度を無意識に上げる。

「……もう、着くんですか」

ああ、もうすぐさ。だから、もう少しだけ耐えてくれよ。

そう言ってるうちに家が見えてきた。

……そろそろ、お楽しみ時間だな。

会心の笑みを浮かべた瞬間だった。

後頭部に激痛が走ったのは。

「わあっ!?!」

「何馬鹿正直に他人について行ってるんだ!速く逃げるぞ!!」

黒服を纏い、サングラスをかけた男はそう言っただけで彼女の手を掴んで、彼女の全速力をも凌ぐような途轍もない速さで走り始める。

ふわふわした意識のなかだったために何が起こったのかすら分からない。

聞き覚えのあるその低い声。まだぼんやりした視界に映る輪郭のぼやけた黒い姿。

「あ、るばーとさん……?」

特殊部隊に所属している人で、母さんは右腕みたいな存在だったんだだけ。大体仕事してる時はよく一緒にいて仲が良かったんだっとな。

「なんでここに」

「只の偶然だ。一般人だったら普通に無視してたかも知れんが相手が相手だったからな……」

「相手……あの人そんなに危ない人だったの?」

「いや、あいつの顔が不味かったんだ。あのまま連れて行かれてたら……」

その沈黙がどういう意味なのか。きつと不味いことになってたんだろう、とぼんやりと考える。

同時に、ある違和感に気づく。

あれ、可笑しいな?どうして危険が迫ってるのに、全く意識がはつきりしないんだろう?

不思議なことに、まだ頭が冴えない。むしろどんどん混濁してくる。

もしかして、これがツナギの男の個性なんだろうか？
ああ、今にも眠ってしまいそうだ……

「まだ寝るな！」

凜とした男の声が彼女を現実へと引き戻す。

何をやっているんだ、自分は。今はそんなことをしている場合じゃないだろう。

眠ることなんて、後でもできるじゃないか。

まだ眠気はある。でも、今は眠ってはならない。もう少しの辛抱だ。

心の中で自らに喝を入れる。

さあ、とつても危険な鬼ごっここの時間だ。

p. m. 0 : 4 0

団地の間を、河川敷を、二人は風のように走る。走る。

「待つんだ！」

こちらを追うツナギの男との距離が迫る、迫る。

「チツ、本当にしつこいな、全く！」

苛立ちからか、男の言葉が母国語になる。

「お前は街中に向かえ！」

そこまで行けば奴も追ってこないはずだ！」

「分かりました！」

彼に合わせて彼女も英語で答える。五年ぶりに英会話をしたものの、問題はなさそうだ。

彼女は《ブリンク》を時々使いながら移動する。
彼は彼女よりも強い。きっと何らかの方法でどうにかするんだらう。

酸素不足で霞む彼女の脳裏には思い出がフラッシュバックしていた。その記憶の中に居るのは、自分と母さんと焦凍とナギとアルバート、そして一人の少年……その一人だけなぜか顔がうまく思い出せない。

ウニみたいに頭がトゲトゲしてる少年。

忘れてはならない、大切な、大切な人だったはずだ。

でも……思い出せない。

*思い出「アルバート・ウエスカー」を取り戻した。

p. m. 1:07

「！」

何かを蹴飛ばした感触。

前方を見れば、ノートが落ちていた。蹴飛ばしたのはこのノートのようだ。

そのノートは一般のとは明らかに違った、異様な外見をしている。

夜の闇に溶け込むような色をしたその表紙。そこにタイトルのように——いや実際タイトルなのだろうが——文字が綴られている。

【DEATH NOTE】と

彼女はそれを……………